

2016年度「FDを推進するための活動補助事業」の実績報告

人文学部 森 直久

[目的]

アクティブラーニングの一つとして近年注目されている『学び合い』（二重かつこの学び合い）を、教養科目（臨床心理学科必修）「心理学(1)」に導入する。

『学び合い』は、受講生同士の相互交流を中心とし、課題の全員達成を目標とするなかで、学力の三要素を等しく涵養しようとする方法である。小学校から高校までの実績報告は多く、大きな成果も上がっているが、大学での実施例はいまだ見られない。

高校までの学習において、学力の三要素が十分に伸びているとは言い難い本学の学生にとって、『学び合い』の導入は光明となるのではないかと思われた。

相互交流を促すため、受講生にネームプレートをつけてもらうことにした。また、補助員(SA)として上級生を数名配置することにした。予算申請では、90名分のネームプレートと補助員用の教科書代を計上した。

[方法]

『学び合い』の提唱者である、上越教育大学西川純教授の授業次第(西川, 2015, 2016他)に従い、授業を展開した。一週間前に授業中に解決すべき課題を学生に送信する。課題は教科書の内容をまとめるもの、教科書の内容を日常に適用して考えるもの、学説の説明や批評である。

「全員が授業時間内に課題を達成すること」「各人が最適な学習環境を整えて良いこと」が毎時間強調される。また、前回授業の取り組みの振り返りを、ハンドアウトや口頭で行ない、学生の活動の改善を毎回心がけた。

教員は基本的に直接教えず、受講生同士の教えあいを促し、またホワイトボードやツイッター、web 掲示板などを利用した情報の共有と交換を推奨した。

[成果]

期末テストの結果を前年度と比較したところ、『学び合い』でよく見られる効果である、「平均点が向上し、分散が縮小する」現象が見られた。

しかし5分の1ほどの受講生は、LINE上にアップされた模範解答を写すことで及第点に達していた。ほぼ同数の受講生が積極的な交流をしていなかったが、これらの学生は『学び合い』の恩恵を受けていないものと思われた。テスト中、インターネットによる資料検索を許可したので、LINE等による通信を不可避免的に認めることとなった。

期末テスト終了後、受講生達から『学び合い』のない後期に自主ゼミを開催したいとの申し出があった。この要望を聞き入れ、年度が変わった現在も継続中である。また自主ゼミの学生を中心として、今年度の補助員への立候補があり、今年度は最大8名の補助員が入ってくれている。ほとんどの学生が、期末テストの高得点者であった。ちなみに無給である。

[課題 (展望)]

積極性の高い受講生が「教師役」に、低い学生が「生徒役」になり、擬似的一斉授業が発生してしまった。これが最適な学習環境とは限らず、むしろ積極性の低い学生にとって「楽な」環境でしかなかったことは、LINE 依存合格者の割合から示唆された。

課題の難易度が高く、相互交流以前に、個人が課題を達成することで手一杯になっている状況が散見された。課題の解き方や教科書の参照ページを示すなど、足場作りの必要を感じた。

中間アンケートでは高評価を得ていたが、最終評価では昨年より大幅にポイントが下落した。自由記述から、熱烈な支持者がいる一方で、「楽をしたい」受講生には負荷が高く好まれないことがうかがわれた。『学び合い』の利得を理解、実感させる工夫が必要と感じた。

引用文献

西川純 2015 アクティブ・ラーニング入門 -会話形式でわかる『学び合い』活用術- 明治図書.

西川純 2016 資質・能力を最大限に引き出す! 『学び合い』の手引き 明治図書.